授業研究に臨む研究者のスタンスの違いと国語教育の可能性
ラウンドテーブルにおける意見交流の記録から

キーワード：国語科教育内容学、メタ認知能力、発掘のための教育

福山市立大学　森　美智代

はじめに

本稿は、2015年3月6日（金）に福山市立手城小学校で開催された国語教育思想研究会主催「国語科授業研究のあり方」を考える研究会におけるラウンドテーブルについて、司会を務めた森が記録するものである。

午後から図書室で行われたラウンドテーブルでは、まず登壇者である難波博孝（広島大学）、住田勝（大阪教育大学）、松崎正治（同志社女子大学）がそれぞれ、自身が行っている授業研究について報告し、その後参加者による意見交流の時間をとった。司会は森美智代（福山市立大学）が務めた。参加者の多くは学生（大学院生を含む）であったが、意見交流においては、中学校教員や大学教員らから意見が提出された。

研究会では、その後、5年生の「わらぐつの中の神様」を教材とした授業を参観し、続いて6年生の「よだかの星」を教材とした授業を全員で参観した。それらをもとに、ランチルームにて先の登壇者4名（司会は森から難波に交代）に加え、授業者である川本忠司教諭（5年生担任）と高橋典子教諭（6年生担任）が登壇し、授業研究のあり方について、具体的な授業を対象とした議論が行われた。

本稿は、前半に行われたラウンドテーブルについて、全体での意見交流を中心に記録するものである。

1、それぞれに異なる授業研究でのスタンス

ラウンドテーブルでは、まず、企画者である難波から「私は、なんのために、小中高の国語科授業に関わっているのかー 私の、臨床国語教育研究ー 」と題して、本ラウンドテーブルの問題提起と自身の授業研究について発表が行われた。難波は、「研究者はいつもびくびくして教育現場に出向いている」と述べた上で、その原因の一つに「国語科教育内容学（日本語学、文学、言語学、などなど）の、日本における、未発達、未成熟、無理解」があることを指摘した。同時に、このように不安定な一方で、国語教育学（教科教育学）の研究者は、他の学問領域の研究者とは異なり、教育現場を自分の研究の道具にはしないで、研究の対象とともに改善していくべき対象だと考える点を強調した。

難波が授業研究において心にとめているのは、4点、「研究に逃げない」「根本をつかまえる」「全部を一つと考える」「外部（近代国家・グローバル社会・行政機構・学校・地域……）と折り合いをつける」ことである。

特に「全部を一つと考える」というのは、すべての言語活動は（授業も、文章も、音声言語も、文学作品も、説明も、子どもの学問も、教師の学問も）、人間の無意識（信念・価値観・メタ認知・認識…）によって縛られているという見方を出発点とする。言語活動から生まれたすべてのものが無意識の欲動とか暗黙知といった無意識下にあるものと、言語によって構築されたメタ認知（相手・目的・場面・自己・言語・世界）との相克によって生み出されたものであるという見方である。難波の主張する国語教育は、こうした言語をコントロールしている本来的な無意識と、言語構築的なメタ認知とを、ある程度意識化し、束縛している制約（～せねばならない）をほどくことである。ゆえに、授業研究における難波のスタンスも、ここにあると言える。

一方、住田は、難波の指摘した国語科教育内容学の未成熟さにこそ「活路」を見出さそうとする。国語科の内容に大きな部分を占める文章教材等の「テクスト」が、子どもたちの学びを拓いていく可能性を見出そうというスタンスである。住田は、子どもの学びが発達する現場、教師が学びを整理させる現場、そうした現場にテクストの構造が何らかの作用をし、解釈が拓かれていくプロセスに立ち会えるのが授業研究であると考える。住田によれば、授業研究は「単独者ではなく複数の授業という共同体において、テクストの解釈が生成される際の、子どもたちが執り行う分析の様子を見つけることができる場であり、個人的体験としての解釈が、社会的に開示

され、流通して、交易され、洗練され、淘汰されていくプロセスの断片を見せてくれる場である」と言う。

また、「校内授業研究会と私の歩み」と題して発表を行った松崎は、一人一人の教師に寄り添い、厳しい時代、厳しい環境の中で生きる教師や子どもたち一人一人の可能性を信じ、支える仕事をしたいと考える。そのために重視するのが、教室の掲示や空気感等による「授業の雰囲気」、そして「学級の様子や歴史」「授業の前後の文脈」、さらに「授業での（時として想定外の）出来事」、最後に「教師と子どものコミュニケーション過程」である。

特に、できるだけ教師から聞くようにしているという「学級の様子や歴史」のような、対象となる授業の背景を重視するスタンスは、松崎自身のライフストーリー（挫折経験も）と関連して、教師のもっている背景や文脈を重視し、教師を励まし、育てようとするスタンスとつながっている。

以上のように、登壇した3名の研究者が、同じ国語教育を学問領域として研究しながらも、異なるスタンスから授業研究を行っていることがわかる。しかし、難波の指摘したように、教育現場（授業）を研究の道具とするのではなく、研究の対象とともに改善していくべき対象だと捉え、自らの課題へと変えていく点で3名が共通していることが見てとれる。

2、全体での意見交流

以下に掲載するのは、ラウンドテーブルにおける全体での意見交流を文字に起こしたものである。森：森、難：難波、住：住田、松：松崎の発言を指している。また、フロアからの意見はA〜Dで示している。なお、わかりにくい部分には森が丸括弧等で注を付している。

森　ありがとうございました。それでは、引き続き、討議の時間にしたいと思うんですが、これはもう自由にやってしまっていいんでしょうか？

難　自由でいいんじゃないですか？

森　はい。じゃ、あの。

難　あんまり長くしゃべらないでね。

松　わかりました。

森　もう、全体、もう前（登壇者）も、自由にご質問やご意見等ございましたら、お願いいたします。

難　お互いが、言ったことをちょっとだけ交流してはどうかな。僕が言ったこととか、それぞれが言ったこととかに。僕は、あの、住田さんの、今日の住田さんの報告で言えば、住田さんは教材に偏ってる。で、松崎さんは、どっちかっていったら、どうやろ教師かな。

松　教師に偏ってる。

難　だよね。どう？

松　教師に偏ってるってことはないんですけど、あの、教師の成長。

難　に、かなう。どっちかっていったら、住田さんはやっぱり教材やよね。教材から、より、こう、見えてくるっていう世界がうれしいみたいな。

住　あの、結局難波さんが言われた、その、教科内容学の未成熟さがあって、そこに僕の活路はあるんですね、実は。

難　うん。うん。うんうん、何となくわかるよ。

住　はっきりしてないから。

難　うん、つくれるね。

住　この教材と教材、どうつながってるねん、わからん。こう考えたらどうですかねって言い得るのは、そこにすき間があるがあるからなんですね。だから、あの、まさに教科内容学がかちっとしたら、僕がやることはない。あの、方法、授業の方法考えるのは、全く僕は違うことやるんですが、でも、まさに僕が語ってるのは、今、えー、一番不安定なそこを、具体的な授業の中の事実を積み上げれば、これ、前の単元とこうつながってるんじゃなかろうかみたいな話をできる。や、ま、そこのために僕は行ってるとこがあるんで、ま、それが本当に現場のニーズと合ってるか、合ってるケースと合ってないケースがあるんですよ。無理やりこういうことが大事ですねってねじ込みますけど、そこが。

難　うん。うん。うん、本当にそうだなと思って、僕も、その一、不安定さ、教科内容学が不安定であるということが、びくびくしている原因ではあるんだけど、おもしろい。他の学問領域にはないおもしろさではあるんだけど、でもやっぱり、やっぱり、俺は大丈夫か、今俺が言ってることは大丈夫かっていうのはすごく不安で、ええと、こういうふうにお互いがやってるのを聞き合うと、すごく安心するというか、あの一、僕自身は、今日、自分がどういうふうにやってるのかはちょっと話しし切れなかったんやけど、自分のレジュメの後ろの方に、この手城

小学校でやってたことについては後ろにずっと書いてて、あの、これ校正刷りで申しわけないんだけど、もう既にウエブには載ってるやつを、新しく、バージョン変えて、吉田（裕久）先生の退官記念の本を出そうと思ってるので、載してるんですが、自分が具体的にどういうことやったかっていうのを書いてあるんですけど、あのー、ま、すごいよかったなと、聞けてよかったなと。お互いにどうですか、ちょっと聞いてみる。松崎さん、難波の話とか。

松　ああ、難波さんのはやっぱり、僕はやりくり（「外部（一例としての学習指導要領）と折り合いをつける」の部分）というところを非常に共鳴しました。だから、あのー、学習指導要領はもちろんね、あのー、一方的に批判するだけじゃなくて、まあ、偉大なる常識ですよね。で、それを、まあ、どんなふうに活用していくのか、という。で、それはやっぱり、僕が一番大事なのは、子どもの育ちというかね、子どもの成長。子どもがこういう大変な時代にどうやって生きていけるか。そのためには、もう学習指導要領でも何でも使うぞっていう、そういう感じですね。だから、学習指導要領ありきでなくて、子どもたちがこれから生きていく、この21世紀の大変な時代に、どういう、この、何ていうかな、ツールというか、世の中を、こう、やりくりしながら生き抜いていくツールを、どうやって身につけていってもらうか。で、そのことが、その、支える教師、あの、そういうことをやっぱり先生方にはすごく意識してほしいので、ぜひ生き抜くためのツールをね。

で、僕が行っている学校も、だから、今、今日ビデオで映ってる学校も大変な学校で、あのー、児童養護施設を抱えているところで、クラス三十数人いたら、やっぱり6人とか7人、施設の子がいるんですよね。で、雨の日とかね、絶対傘差してこない。びしょぬれになってくる。それは先生、先生から「大丈夫？　ナニナニちゃん」って、こう、抱きかかえてもらうために。何回、何回でも、絶対傘差してこない。びしょびしょになってる。で、そのたんびに世話してもらえるのがやっぱりうれしい。そういう現実がある学校なので、だから、学力的にも大変やし。で、何で、この子はこうかっていうのは、やっぱり今、個人情報が厳しい時代やから、教えてもらえない。そんな中で先生方はもう綱渡りみたいにしてね、毎日もう、モグラたたきみたいして、やってはんねんけども、そんな中で、あの、やっぱり授業を充実ささないと、ほんまにモグラたたきはモグラたたきになるので、えー、授業で子どもたちが居場所として、「あ、授業おもしろい」「このクラスでみんなと勉強するの、おもしろい」って感じてもらえるような場をつくりたい。だから、そういう意味で、難波さん言ったやりくりとか、えー、住田さん言ってた、その、授業の中で子どもの読みが拓かれて、みんながそれを共有するっていう、あの、授業という場で何か新しい世界ができていくというすばらしさを、僕は、あの、授業研究で実感できたらなと思います。

森　はい。住田先生いかがですか。

住　あ、えー、あの、難波さんが言ってた、その、制約としてのでかいもの（「外部」＝近代国家とその具体としての近代家族、近代社会）ですよね。で、まあ、いわゆるやりくりしなきゃいけないものも含めてなんですが、あの、同じようなことを思ってて、その制約って、逆に言うと、ま、言語そのものであったり、いろんな表象形式、あの、何しても、化学式だの何だのって全てが、あのー、私たちが世界と対話するときのインターフェースになりますね。だから、それで息してる。それで、それで生きてるっていう側面もあるので、あの、そういう意味では、自覚、自分が何によって生かされているのかということの自覚化ということが問題かなと。僕は、だから、あの、子どもたちが自分を取り巻いている、大気みたいなもの、空気みたいな言葉を、やっぱり色をつけて、あの、フィルターとしてちゃんと見据える。そうしないと、実は取っ払えたり変えたりはできないわけで、その、そういう意味では、ただ単に制約として批判はできないですね。その制約の中で育っていく、生きてしまうために、生き、生かされているという側面と、それによって苦しんでいる側面という、あの、二重性があるなとふうに思いながら受け取りました。

だから、そういう意味では、今、僕が言った、その、教材、物語というのはどういう構造で、どんな背景を子どもたちに拓くのかというようなことが、あのー、語らなきゃいけないなと思います。でなきゃ、さっき、あの、東京書籍（の教科書）から設定・展開や、設定・展開・山場がなぜ消えたって、僕はその会議に出てたので、あの、言いますと、それではうまくいかない教材があまりにも多過ぎるんですね。当たり前のことなんですが。今日の資料の後

半は、あるその学校でやった夏期研なんですが、そこに三段落ちの話ばっかりなんです。『きつねのおきゃくさま』とか、ああいうやつって、それでやらない方がうまくいくわけです。だから、他の構造の方がうまくいきませんかっていうことは、幾つかのパターンがあるよみたいな話を、あの、いろんなところでしゃべってる。一つは、こういう教材性があるじゃないですか、こういうのを生かしましょうよっていう話をする中で、まあ、別にそれは、あの、東書が変わった原因ではないんですけども、そういうようなことを、一方では開示しなきゃいけない。自分たちが読まされている物語のフィルター性っていうのはどういうふうな、事実、世界と私がどういうふうに対話するために、用意された物語であるのかということをもって、教科内容学にかわって頑張っていかないといけないなというふうに思っています。

で、松崎先生が言われた、あの、特に挫折体験のところを僕もっと詳しく聞きたいなと思うんですが、ちょっと時間ないと思うんですが。僕もよくやってしまうところで、「今日の時間はクソでした」みたいなことは言いませんが、「いやあ、おもろなかったな」と思いながら、どうしよう、どうやってそこから何を見出そうかっていうときに、ついつい批判的なことや、課題をたくさんめに言ってしまうこともあったりするときに、一体、その、僕は何のためにここに来てるのかということを例えば考えたりするわけですね。ここは何となく、この人の自信を失わせないために、最後は「頑張りましたね」って終わろうかなとか、いろいろ考えながらずっとしゃべり続けたりもするんですが、ただ、あの、今、今と、今までと同じことをこれからも続けるんだったら、俺が今日ここに来た意味はないなと。つまり、外部の人わざわざ、呼んで、金取って、予算取って呼んだ以上は、何かかき乱してほしいんだろうなと、逆に、居座って、居直って、居直ってです、居直って、何か言おうみたいな。ちょっとインパクト、「あ、傷つけちゃったかな」と思いながらも言ってしまうことが多いという感想を持ちました。

森　ありがとうございます。あまり時間がありませんが、いかがですか？

森　黙ってると当てますよぉ。

住　怖い。

全員　爆笑

難　もう当てたら。

森　じゃ、ちょっと、では、真ん中の前の方にお座りの皆さんはいかがですか？　どなたか何かありませんか？　あ、お願いします。

A　すごく、あの、思ったことは、本当に結局、発見なんだろうなと。発見のためにことをやるっていうことで、あのー、難波先生の言ってたような無意識とメタ認知とのその中に自分が存在するみたいな、私はその、あの、結局、自分の判断は全てそこのゲシュタルトという、その内面のどうしようもないところが出ているので、結局教師教育はそこに、自分、自分自身で、「あなた、こうですよね」じゃなくて、自分自身で自分が目を向けることができるように、周りがサポートする。そのために、あの、私たちっていうか、私なんかは、あの、自分が気づいた、「ああ、私、こんなことに気づきました」って言える空間をつくることで、担当者（授業者）もそれぞれ自分が気づいたってみずからが話せるような、そういう空間にしたいなと思いますね。

だから、あの、そこのどうしようものっていう、やっぱり、その、自分の中に自分が気づかないでいるものをどうやって自分が気づこうとするかっていう瞬間なのかなと思いますし、あの、自分では気づかないのを、「あ、こんなにそうなってた」っていうのに気づいていく瞬間をつくっていくんだなと思いながら伺ってたんだけども、もう本当に、さっきおっしゃった、みんないいとこありますよねっていうのは、本当われわれもそうなんですけど、でも、私一番、今、その、制約とかがあると思うんでけど、あの、到達のための教育って私は、言ってしまうんですが、到達のための教育で、今まで約40年きたと思うんですよね。だから、それを、発掘のための教育に変えない限りは、恐らく川崎のような事件もあぁゆうふうな事件も、やっぱり、多発するところに、私は、すごく、飛躍するようですが、あのー。

難　はっくつ？

松　発掘。

A　発掘。発掘。これ、あの、大村（はま）先生がおっしゃっていますよね。個々の、教育とは個々のものを発掘するんだと。発掘のために、どうやってするかっていうので、教師がまず、発掘してもらえる、自分のよさとか。そういうのを、おべんちゃらじゃなくて。そういうのとか、学習者が学習してる、場面で、あの子こんなことありましたねってお互い

が発掘していく、そういうのが、研究資料の、あの、この授業研究の中で心がけたいなと思いながら伺っていました。はい。

森　いかがでしょうか。

B　私、中学校（に勤務している）で、今日ここに来さしてもらって、あの、教科担任制なので、教師って寂しい、小学校と違って、いろいろ教えてもらえる人が小学校はたくさんいらっしゃる、ベテランが。中学校は、特に私は過疎、過疎の地域から来た、１学校、一つの学校にたった教科の担当者１人しかいないので、先ほどのメタ認知ではありませんけど、やっぱり自分のやってることを何か、たたいてって言うとちょっと悪いようなこと、何かもっと教えてとか、いじめてとか、いじめてとかあんまり言うと。あのー、でも、それって自分がやってることがすごく不安、不安でたまらない方（人）が非常に多い。で、私も行政から帰ってきたときに、何やらされるか。とにかく、ま、授業見せろ、授業見せろって言ってて、いろんなところで集まるから授業せえと言われる。で、やっぱり、その、もう少し、その、今から特に私たちのところはそういうこと、もっと傾向は強くって、何、自分が、その、メタ認知能力っていうか、メタで見れないことがすごく多いので、それによって、その、自分の、映せる鏡をいろんなところで欲しいと思っている先生がたくさんいる。でも、見せると恥ずかしいっていう。その恥ずかしいというのは、もっと、その、たたかれるということが、要するに抵抗なくなるような、何かそういう土壌をつくっていかないと、小学校の先生とかように一人一人の先生が授業を公開できてないというかオープンになってない実態がある。でも、そこは大学の先生に来ていただくのはすごくうれしい。授業、あの、話を聞かせてもらえる立場（研究者ではない方の立場）とすると、ええと、そういうことがある、あるなと思いながら、話を聞かせてもらいました。

森　いかがですか？

A　たたかれるとか、たたかれたいとかそういうのがあるんですか。

B　ありますよね。

B　恥ずかしいというか、私の粗末なものっていう感じが。

A　何かそれを、それじゃなくて、それこそ材料で、それを担保して、自分、自分にベクトル向くんだよっていう意識でみんなが見てたら、「私、今日、発見したんだけど、私、私にはこういう姿があるんだよ」っていうような授業研にならない？授業研究の中で。

B　今、今、中学校の現場でやってるのは、とにかく、言語活動をとにかくつくれっていう、そこなんですよね。だから、その、自分がやってる言語活動が、その、一生懸命考えたけど、結局しょぼいよなっていうことになっていくときに、自分どう、次どうすればいいのかっていうことを、何かこう、もっとネタが欲しい、確かに、まず。まずネタが欲しい。で、そこへみんな、まずネタやっといて、あとは、やっぱり自分のオリジナリティー、後、どう後、入れていくかっていうことを次考えるっていうような、そんな方が多いような気がします。

A　あの、気持ちはとってもよくわかるんですけど、でも、本当に、あの、コアポリシーに合わないものだったら、絶対その人と合わないですね。うちの院生が言ったんですけど、それは現職の院生さんなんですけど、ぱたぱた、ぱたぱた、ただ貼りつけていって、いつの間にか、貼りつけてたんだけど、身動き取れなくなってて、「私なんだなと思いました」って。そういう瞬間があって、よかったね、この大学、うちに来て、っていう話になったんですけど、ぱたぱた、ぱたぱた貼りつけるんですよ、人から、都合のいいものを。で、見栄えがいいもの。で、使ってやるんだけど、当然うまくいきませんよね。だって、違うんだから、人間が。やってる人間が違うんだから。それに気づかずにやってしまうっていう、その瞬間に気づい、気づくような、「私って貼りつけてただけねっ」ていう。サイボーグになってたわっていう、甲冑お化けみたいな、そんなになってた。

B　甲冑お化け。

A　ああ、そうですね。だから、自分に気づいた瞬間が彼女のスタートだと思うんですね。そういう瞬間を、どうやって、持たせるかっていったら、何か一緒にいて、私、私は自分はこう思ったんだよね、あの子こうだよねっていう、何か発見できる、そう、もの、発見したものを１回、こう、並べながら、本人が気づいていくところに、こう、何かこう、道筋をつくるっていうか、（私たちの仕事はそういう）仕事になるのかなとか思いながら、よくわかんないですけど。すみません。

B　いや、それがメタ認知という。メタ認知能力がまだない。いっぱいついている、まず貼りつかない

と、貼りついていることにも気がつかない。
A　うふふふ。
B　おもしろい。でも、そうだ。多分それ、みんな通るプロセスかもしれない。
森　いかがでしょう。
難　その、その辺、しゃべったら二人とも。せっかく遠いところ、来ていただいてるんですから。
C　じゃ、一言。あの、メタ認知のところですごいおもしろかったなと思ったんですが、あの、要するに大学教員自身も、その、外部の目があると、私の経験、個人的な経験ですけど、割とうまくいく。要するに授業研究って、その、教員が１人で行って、その、何か先生方に何かを教えるみたいな構図になることが多いんですが、そうすると、こう、ま、ある意味で言うと、その、難波先生がさっき言われたように、何様やみたいになると思うし、引っくり返ると、針のむしろみたいになってしまうわけですね。それに対して、幾つかの研究会で、僕以外のところを言うっていう状態があって、で、しかも、その、畑が違う、例えば歴史の高校の先生、その、研究が、っていう感じになったときに、すごく何か、私もおもしろいし、その、その人も、私の言うことをおもしろがってくれるし、そうすると、こう、ちょっと全然違う、あの、自分が最初に考えたことと違う到達点に行くことがよくあって。ですので、その、何ていうか、授業研究会もそういう少し、こう、外部の人が入ってくるみたいなシステムがあるといいのかな。そうすると、その、要するに大学教員としても、そういうメタ的、自分のやってることは何なのかみたいなことを考え直せるのかなという、そんな気持ちを持って今日のお話を聞いてました。
森　何かしゃべらなきゃいけない感じですから、どうぞ。
D　あのー、私はここでしゃべっていいのだろうかと。今日参加さしていただいてますけれども、国語教育あるいは国語科教育の専門家じゃなくて、あの、難波先生がおっしゃる、いわゆる内容学とか、日本語学を専門に研究してます。従いまして、ちょっと、皆さんの議論とはちょっとかみ合わないことを言ってしまうかもしれませんけれども、こんな私のところにも、やっぱり、その、指導助言のようなものがぽつぽつ入ってきまして、年間に。行くと、一番困るのは、自分が、えー、日本語の歴史を研究して、国語ってこんなもんだって自分なりの国語観を持ってますけど、自分が国語だ、日本語だと思っていたものが、この教室においては日本語ではない、そのままでは日本語と呼べるものではないかもしれない、つまり、国語の授業にそのまま私の知識が寄与するわけではないといったときに、やっぱり、この、ええと、私たちの専門性も変わらざるを得ないというか、そういう国語の授業と出会うことによって、日本語学あるいは文学っていうのは変わっていくんだなという実感をひしひしと持っているんですが、そのときに、じゃ、どんなふうに変わっていくんだろう、その、現場に入る、国語教育の研究者でもない私が、どんなふうに変わっていくんだろうというときに、あの、先ほど松崎先生がおっしゃってましたが、教師の願いというか、どんな背景を持ってこの人は授業をやっているんだろうということへのまなざしなしには、あの、もう授業へ自分はコメントしていけない。で、その願いが、ひょっとしたら、その教師にとって、実は願いという形でも明言化されてはいなくて、その、言語化されていないところをうまく言語化していくのが自分の役目かなと。さらには、さらに高度なものに位置づけるような言葉を自分が持たなければいけないというところで、僕は勉強しないといけないっていうふうに思うんですね。

で、もちろん私が行った教室とは別の、もっとすぐれた人が入った教室とは違うものになるかもしれませんけども、そこは自分の専門性というもので、私が思っている日本語の歴史から見た国語観みたいなものでこそつくられる教室、あるいは文学を専門にしている人が入ったときに運営できる教室っていうのは、違ってもいいのかな。もう当たり前のことかもしれません。ただ、一つ言えるのは、やっぱり願い、形にならないものを形に、願いとして明確にならないものを形にあらわす、引きずり出すということなんですけど、そんなふうな感覚を持っていて、それぞれの先生の話をそういうふうな文脈で引きつけて伺いました。
森　ありがとうございます。もう時間が、あの、来てしまいまして、あの、ここから楽しいのになっていう、あるあるな状況なんですけれども（以上でラウンドテーブルを終了致します）。

３、メタ認知能力、そして他領域との連携

以上の文字起こしデータからもわかるように、全

体での意見交流の前半は、登壇者同士による、それぞれの授業研究におけるスタンスの確認と、「外部（学習指導要領あるいは近代国家）とのやりくり」について、後半はフロアを中心に、メタ認知能力についての議論と、他領域との連携、教師＝「私」の発掘について、意見が交流された。

一つ目のそれぞれの授業研究におけるスタンスについては、先の「１、」で述べた通りであるが、それぞれの研究者がスタンスをもとに、授業研究のおもしろさを国語教育の可能性に寄せて語っている点が特徴的である。中でも、住田が国語科教育内容学の不安定さに「活路」を見出しているように、本来は課題や問題点として言及される部分について、未成熟、不安定であることを、それゆえに「つくれる」「他の学問領域にはないおもしろさ」（難波）と言及し、意見交流が展開されている。教育現場を自分の研究の道具にするのではなく、研究の対象とともにつくりかえていく対象だと考える国語教育だからこそ、こうした発想も可能となるのであろう。私は、ここに国語教育という学問領域の可能性が示唆されているものと受けとめている。

二つ目の「外部とのやりくり」について、まず難波は、学習指導要領を例として、「匿名の聖典と捉えるのではなく、人の願いがこもった著作と考え、道具化する」ことを提案し、同時に「〈外部〉そのものの変革への意志を継続して持ち続け、表明し続けることも、国語教育研究者の使命である」と提起した。

それを受けて意見交流では、松崎が、学習指導要領を「一方的に批判するだけじゃなくて」、子どもたちや教師が、大変な時代を生き抜くために、ツールとして、「もう学習指導要領でも何でも使うぞっていう、そういう感じ」と述べている。また住田も同様に、やりくりであるとした上で、「外部」を「言語そのもの」のようなあらゆる表象形式にまで及ぶものであることを指摘し、「私たちが世界と対話するときのインターフェース」であると捉え直した。そうすることで、「外部」は、単に制約として批判できる対象ではなくなる。結果、「自分が何によって生かされているのかということの自覚化」という問題（教師・研究者・子どもたち…の課題）が顕現化する。そして、外部によって生かされているという側面と、「それによって苦しんでいる側面という二重性がある」ことを感想交じりに述べるに至っている。

三つ目のメタ認知能力については、中学校教師であるフロアBから、現場教師の実態について、自身の授業をメタ認知することの難しさが提起された。それに対して、現場教師の経験のある大学教員であるAから、他人の「ネタ」を「ぱたぱた貼り付けて」身動きが取れなくなった現職院生の事例が提出された。他人の「ネタ」を貼り付けていたことに気づいたときこそがその人のスタートなのだという意見である。それに対して、「まず貼りつかないと、貼りついていることにも気がつかない」側面も多分にある、多くの人がそうなのではないかというように議論が展開した。

一方で、研究者にも（研究者にこそ）メタ認知能力は重要であるという意見が提出された。フロアCからは自身の経験をもとに、国語教育以外（他領域）の研究者が同席する複数名の助言者が立つ授業研究の有効性が指摘された。授業に対する助言者として複数名が立つことにより、メタ認知が働き、独断的な授業解釈が抑制されるだけでなく、新しい授業分析の知見を得ることができるという提案である。それに続いて、国語教育以外の研究者であるフロアDにより、「国語の授業と出会うことによって、日本語学あるいは文学っていうのは変わっていくんだなという実感をひしひしと持っている」と述べられ、他領域との連携が、授業研究のみならず、国語教育研究、さらには連携した他領域の研究においても、新展開をもたらし得ることが指摘された。

五つ目に、教師＝「私」の発掘について、フロアAが大村はまの言葉を用いて言及したのが、研究者等のサポートによって教師（や子どもや授業）を「発掘」し、最終的に「「あなた、こうですよね」じゃなくて、自分自身で自分に目を向けることができる」ことの重要性である。他人からの指摘を受けて始めて自らを省みるというのではなく、自ら自身を見直す自己省察の重要性への言及である。

Aの言う「自分の中に自分が気づかないでいるものをどうやって自分が気づこうとするか」という問いについては、フロアDが、松崎のスタンスである教師に寄り添う授業研究を取り上げつつ、「教師の願い」や授業の背景へのまなざしについて言及している。そして、Dの授業研究におけるスタンス、すなわち「その教師にとって、実は願いという形でも明言化されてはいなくて、その、言語化されていな

いところをうまく言語化していくのが自分の役目かな」という授業研究に臨むもう一つのスタンスが述べられている。ここに、教師が自分で気づけないものに気づいていくための、研究者のサポートのあり方の一つが提案されたと言えよう。

以上のように、ラウンドテーブルの意見交流では、授業研究のあり方について、さらなる研究者たちのスタンスが明らかとなった。本稿で直接的に言及できたのはフロア D の発言に対する考察のみであるが、発言等をもとにすれば、それぞれの参加者のスタンスを読み取ることが可能であろう。

このように、研究者によってスタンスが異なるからこそ、「研究者が学校現場に入って何をしているのか、今のままでいいか、問い直す（本研究会のサブテーマ）」ことが必要となる。おそらく、国語科教育内容学の不安定さについて、「他の学問領域にはないおもしろさ」と述べながらも、難波が「今俺が言ってることは大丈夫か」という不安を繰り返し口にするのは、研究者が今の自分を問い直すことなく学校現場に居座ることへの危惧、さらに言えば、そうしたことへの強い否定があると推測できる。

また住田が「今までと同じことをこれからも続けるんだったら、俺が今日ここに来た意味はないな」と考え、助言を行うに至る過程（助言した後も）においても、こうした自己省察が反映されている。

同様に松崎においても、自身の挫折体験から、若い教師の授業を単純に批判するのではなく、その教師の成長を見据え、子どもたちの可能性を常に感じながら、ものを言うことの重要性が述べられていた。

さらには、フロアからの意見において、メタ認知能力や、「自分に目を向けること」への重視が提出されたのも、こうした流れに位置付けられる。

つまり、研究者が今の自分自身を問い直すことなしに学校現場へと介入することなどあり得ない、そうであってはならないという信念のようなものがここから見てとれる。

先にも述べたが、国語科教育内容学に見られるように、国語教育という学問領域には未成熟さ、不安定さといった根本的な課題が堆積している。この根本的な課題は、国語教育という学問領域全体の重要な課題として取り組むべき深刻な課題である。しかし、未成熟で不安定であるからこそ、「つくれる」「おもしろい」学問領域である側面も合わせ持っている。こうした国語教育の可能性を未来へと拓いていくためには、それぞれの研究者が今の自分に安住することなく、自己省察をし続ける必要がある。研究者が、今のあり方でよいと思えることと、同時に今のままではいけないと思えることのために、今回のような授業研究のあり方を問い直すための研究会が、今後も続けられる必要があると言えるだろう。

おわりに

本研究会は、福山市立手城小学校の全面的な協力なしには実現することは不可能であった。このような会を実現できたのも、難波による長年の手城小学校との連携、さらにそれを引き継いだ森と宮本加代子校長との関係（宮本校長が前任校において、国語科の研究を始める際にお声かけを頂いて以来、研究者として育てて頂いたと思っている）があってこそである。研究会の準備と当日の運営に関わって下さった皆様、また、参会された皆様に対し、ここに感謝を申し上げる。